

温 故 知 新

いしづち森林組合 代表理事専務 永井 敦

先日、地方紙に目を通してると特集記事に目がとまりました。そこには、平成16年の台風被害により崩落した地元の山の写真と共に、林業の衰退で荒廃していった地域の状況や地元のお年寄りの談話が綴られていました。こういった記事を目にしますと、地域の森林を守る仕事に携わる者としては心が痛みます。

平成16年は6度の台風通過に伴う豪雨と強風により土石流や風倒など、林地や林道施設に甚大な被害を被った記憶が昨日のここのようによみがえってきます。この年の災害の経験は、「森林を適正に保全することが災害に強い街づくり・山づくりにきわめて重要な役割を担っているか」ということを地域住民に強く印象づけるとともに、「森林のもつ公益的機能のうち水源涵養機能と土砂流出防備機能を強化するための森林整備の推進こそが当地域における喫緊の課題である」ということを改めて認識させられた出来事でした。

記事のなかでも特に目を引いたのは、地域のお年寄り4人の談話でした。記者インタビューに対して、昔を懐かしむように目を細めながら質問に答えている姿が目には浮かんできます。

「昔の山はきれいかったけどねえ。今は手入れされてないから谷にも木がよけ流れとるがね」女性(83歳)

「30年前ほど前は材木を満載したトラック

がよく通っていて、材木を降ろして空になった荷台に学校帰りの子供たちを乗せていました」男性(72歳)

「うちは川が近くじゃけんね、(台風の時は)すごい水なんよ。近くの橋に木が詰まってせき止めたら…」女性(74歳)

「自分の山、なんで大事にせんのかなと思うけど年取って手入れできんようになってるんです。かずらに巻かれてどの木が何の木かわからんようになってしもうて。山も怒ってるんでしょ」女性(87歳)

それぞれの言葉に地域の森林を守りつづけてきた自分たちの山への思いを強く感じました。彼や彼女たちにとって山は身近な存在であり、生活そのものであったのかも知れませんが、その山が今は見る影もなく荒廃し放置され、時には牙をむき自分たちに襲いかかってくる現実に対し、歎きから溜息に変わってきていることがインタビューの言葉から汲み取ることができます。かれらの言葉を私たち山を受け継いでいく者への警鐘として重く受け止めていかねばなりません。

山林所有者や林業の担い手の高齢化が進む中、私たち森林組合が「地域の人に安心・安全な災害に強い山づくりを目指そう！」と決意を新たにした特集記事でした。

(ながい あつし)